

(2011 年・上海) 清末上海の日本語新聞『上海新報』(1890 年～1891 年) が見た日本と中国(1)

1. 問題提起—租界とメディア研究

2. 清末上海と日本語新聞『上海新報』1890 年の創刊

(1) 清末上海の日本人

(2) 『上海新報』1890 年の創刊

3. 『上海新報』の社論からみた日中関係

(1) 『上海新報』に見える日本論—「勸奨誘導」の日清貿易論

(2) 『上海新報』と日本人婦女の「洋妾」問題

(3) 『上海新報』が論じる清国商人論

4. 『上海新報』を読み解く様々な視点

5. おわりに—『上海新報』のその後

上海の日本語新聞『上海新報』(1903 年—1904 年) の世界

孫安石 (神奈川大学)

1. 問題提起—租界とメディア研究

清末上海のメディアに関連する研究は主に、上海史研究と中国新聞史研究の分野で蓄積がなされている。

例えば、上海史研究の分野では上海通社編『上海研究資料』(1936 年) 中の「新聞事業」と「外文報紙史話」が上海における新聞発展の歴史を①経営主体、②印刷機械、③紙面分析からまとめており、また、中国新聞史分野では近代中国を代表する新聞として『申報』と North China Herald などを取り上げた研究が数多く発表されている。

その中でも、熊月之『西学東漸与晚清社会』、馬光仁『上海新聞史』は清末の上海新聞史研究を理解するための重要な先行研究であり、近年は馮悦『日本在華官方報』(新華出版社、2008 年) など優れた研究業績が発表されている。

日本側の研究として注目すべきものとしては、中下正治『新聞にみる日中関係史』(研文出版、1996 年) があり、中下氏は、著作の中で「日本人経営新聞小史」という項目を設け、中国における日本人経営の新聞史を、

①1882 年—1894 年日清戦争以前—第 1 期

②1895 年—1900 年義和団—第 2 期

③1900 年—1904 年日露戦争—第 3 期

⑤1905 年—1911 年辛亥革命—第 4 期として区分し、中国で活躍した日本の新聞人の類派別

分類を試みている。しかし、これらの研究において上海の日本語新聞に対する分析はまだ十分に検討されているわけではない。

【表 1】上海の日本人経営の新聞（中下正治『新聞にみる日中関係史』による）

- 『上海商業雑報』、日本語、1882 年 7 月創刊（第 1 号）—1883 年 10 月（第 11 号）？
- 『上海新報』第 1 次、日本語、週刊、1890 年 6 月 5 日創刊（第 1 号）—数カ月？
- 『上海時報』第 1 次、日本語、1892 年春創刊—1 年足らずで廃刊
- 『上海週報』、日本語、1894 年 1 月創刊—不明
- 『仏門日報』、中国語、1894 年 1 月
- 『上海新報』第 2 次、日本語、週刊、1897 年—数カ月？
- 『同文滬報』中国語、1900 年—1908 年に『滬報』に改名
- 『上海週報』第 1 次、日本語、1903 年 12 月 24 日、
- 『上海新報』第 3 次、日本語、週刊、1903 年 12 月—1904 年 3 月 16 日に週刊『上海日報』に改題、7 月 1 日に日刊紙に再出発
- 『上海日報』1904 年 7 月 1 日—上海 3 大日本新聞の一つ

例えば、【表 1】は中下氏が整理した上海において日本・日本人が係った新聞であるが、その殆どについては詳細が明らかにされていない。勿論、上海だけでは中国のその他の地域と租界で発行された日本関連の新聞雑誌についても同じ問題点が指摘できる。そこで、今回の報告では 1903 年—1904 年に上海で刊行された日本語新聞（週刊）『上海新報』を取り上げ、その概要を紹介し、今後の上海とメディア研究の端緒としたい。

1. 『上海新報』の創刊号（1903 年 12 月 26 日）と日本

それではここで『上海新報』の創刊号に掲載された「発刊之辞」を通して、上海の日本人が抱いた当時の時代認識というものを垣間見ることにしたい。

「列国の視線は東洋にあつまり東洋の問題は支那に集まり吾人は東洋に国すと雖も自家の問題を他人に解釈せらるべき境涯をば、己に業に脱却して、列国と共に清国の前途に横われる、幾多の未決問題を解釈すべき位地に立てり、否歴史上及地理上の関係より、少くとも列国人の前列に立を進まざるべからざる責務を有せり而かも悲む我邦人は欧米列国人の為に機先を制せられて、毎に常に其後へに膛若たるを（中略）千百九十五年日清戦争の終局馬関条約に於て、諸器械輸入の条項を明確に規定せしより、絹糸綿糸の紡績及幾多の諸工場忽然上海に現出せり、而も是れ我邦人の興る所に非ずして、其条約の惠澤均霑せし欧米人の経営に係れり、且つ彼の条約に依りて、蘇杭州及長江の上流に、幾個の市場を解放せしめたり、而も其利に浴するものは多くは欧米人にして、我居留地の如きは、所

在の経営に係る、二三汽船会社が長江航路に一指を染め、又上海に於て紡績工場を経始し、大冶し鉄礦を採掘する等、多少人の耳目を惹くものもあるも、猶未だ言う足らず、(中略) 若は夫れ清国内に於て、英語を会得する者十五万人ありとすれば魯語を解する者十万人、獨語佛語の行わるる、少なくとも三四万人あるべしと思わるる間に我が日本語の行わる範圍果して幾何ぞや (中略)」

『上海新報』は欧米人の中国進出に後れをとった日本の現状を改善すべく、その拠点になる場所が他でもなく中国の貿易の中心である上海であると認識していた。

「清国に於ける凡ての問題は悉く経済的方面より演繹し及び帰納せざるはなし、而て十八省の経済を左右すべき主動力は、係りて長江一帯の上にあり、顧みれば我同胞二万有余長江の咽喉を扼せる上海に來寓して、各方面に歩武を進めんと洵に其所を得たりと謂つべし、然れども一たび其内容を看破する時は吾人還た言うに忍びざるものあり」

そして、『上海新報』の創刊が上海に居留する日本人のための「目覚まし時計」であり、晴雨計であり、電話機としての機能を担うことを約束している。

「吾人豈敢を先覚者を以て任して同胞諸君を指導すと爾か云わんや只諸君の惰眠を警むべき 枕頭に置かる、自覚時計たれば可なり、諸君の身邊に來る気圧の高低を予報すべき晴雨計たれば可なり 諸君の意志を交換すべき電話器たれば可なり 吾人は諸君の為に利用せらるべき一種の器機たるに甘んじ 諸君の為に何等か貢獻する所あるを以て足れりとするもの」

2. 上海と日本人の印刷出版

ところが上海で日本語の新聞『上海新報』が創刊されたことは当時の上海の活発な印刷出版事業を抜きにしては語れないものがある。

上海の印刷出版事情について、『上海新報』の「●上海の訳本界」という記事はその現状を次のように伝えている。

「始めて日本より來りたる旅客一たび四馬路付近を徘徊して至る所比々として訳本販売の書肆あり、訳書局の金看板あるを見て清人が如何に新學を歡迎するかを知るなるべし、之れ団匪の平定後より俄かに勃興したる新現象にして其訳書は時に泰西の原書に依るものあれども多くは日本より訳出せるものにして、日本にて繙訳出版して輸入するもの当地にて日本人の繙訳するもの日本より歸りたる清人自を繙訳するもの等新著新版日に月に増加するは新聞紙上の廣告にても知をるべく」

このような上海の有望な印刷出版事情について、上海の日本人は次のように述べている。

「東京金港堂主人は去る頃より自ら当地に出張し來り備さに作戰計量を為し遠からず当地の出版業界に花々敷打て出る苦なりと云う又河南路に開店しつつ、ある勸学会分社にても現状の如何に拘わらず益々勇進して訳書を輸入し傍ら在留同胞の読物を供給すと云う訳書出版（当地にて）に逸早く先鞭を着けたる作新社は更に一大飛躍を試みんと計画なり」

其他訳書を輸入し或は出版しつつ、ある日本人は樂善堂、新智社、同文滬社等なり」

ここで名前がみえる「勸学会分社」の営業広告は、『上海新報』の中でも次のようなものを見つけることができる。

「○勸学会営業案内

- 一、弊社は専ら清国人向き翻訳図書発売を以て目的と致し候
- 一、弊社は又東京著名書肆の出版物は弘く特約販売致候
- 一、其他日本各地出版物は御使命に依り何時たりとも取り寄せ御用達可致候
- 一、弊社には常に中等教育参考書類及新刊物毎便到着仕り候間御通行の節御立寄り御一覽被下度候

英租界河南路（天津路北）、勸学会上海分社、東京市日本橋区本石町十軒店六番地、勸学会本社」

また、『上海新報』の印刷を担当した中西印刷書局も、「The Shanghai Printing Company 諸印刷及文具一切 中西印刷書局 上海英租界四川路 230 号

敝店が宏大なる規模を以て出版印刷業に従事しつつあるいは大方諸君の己に知らるる所にして今搬日本人諸君の為に日本片假名平假名一切の活字を準備仕りにつき御婦人方の御名刺は勿論広告引札柱暦に至る迄精巧に安直に印刷可仕候間不拘多少御用被仰付度候且つ和漢洋筆墨紙より其他の文房具一切安値に販売り候間御愛顧の程偏に願上候以上」という記事を掲載していることから上海がすでに印刷出版の一大拠点として成長しつつであった事情がうかがえる。

3. 上海と日本人の移民ネットワーク

『上海新報』の創刊記事の中には、もうひとつ当時の日本人の世界に向けた移民ネットワークがいかなるものであったのかを窺わせる「海外に移植せる邦人の五大系統」（峽畝）という記事が掲載されている。

「現今東西両洋に散乱蕃殖せる邦人の数約十万と注せらる而して之を五大系統に區別するを得べし、第一桑港系、第二香港系、第三上海系、第四釜山系、第五浦港系是なり、桑港系の圏内は北米合衆国、加奈太、墨其斯哥一円と中南米より更に延びて布哇及南洋諸島に瓦れり、香港系は■暹羅、安南、新嘉坡、孟買より印度洋沿岸一帯及豪州、比利賓諸島に及べり、上海系及南北清全体に亘り、釜山系は朝鮮一円と満州の一部に及び、浦塩系は西比利亜全部と満州及ぼして旅順大連に亘れり」

中でも大連、青島など中国全土で活躍する日本人の主な経歴は、何らかの理由であれ上海と深い関係をもつものであった。

「上海の地を経たる者少しと雖も其幹部を操縦する者は日清貿易研究所時代に会を上海に於て書生たり 有志家たりし也 されば何れの圏内も其中央本部と直接の関係なきものあるにせよ冥々の裡一道の光明相照し一条の氣脉相通ずること 一篠の系を以て千珠萬環を

串くが如し（中略）桑港系の圏内は書生之を開発して労働者之を継承し、上海系は書生有志家之を開拓して（彼の洋妾なる者亦一個の要素なりと雖も上海以外に関係すること多からず）商人其後へに追隨し釜山系は大阪流の商人（大阪以西の人）を以て終始する者の如く」



4. 上海の日本人婦女と東本願寺

勿論、後発組の日本が上海に進出することは容易なことではなかった。とくに、上海に滞在していた日本人娼妓の問題は、欧米列国と肩を並べたい日本側にとっては国の「面子」をかけて解決すべき焦眉の課題であった。

「◎聞けば此頃日本人の娼妓が沢山あるそうな夫れは娼妓と云うよりも地獄とか淫売とか云うのが適当であろう勿論彼等は外国人を相手にするので馬関の船饅頭見た様に行商（娼）する連中も少なくないと言ふことが其中には羅紗めんをしながら鬼の留守に洗濯と云う工合に内職として出掛ける連中も多いそうだが日本人が段々多くなるに従て人間の屑がふえて来るには困ったものだ」

この『上海新報』の報道からも弱者としての日本婦人が置かれた状況が理解できる。ところが、この娼妓問題に対して対策の中で最も積極的に取り組んだのが東本願寺であった。

「※本願寺上海別院 其一 二千有余の同胞の在留せる上海に於て区々の玉突場はあれども 日本人の大集合をなすべき会館はあらず、三々五々の社会的会合はあれども、全体を通じて慶弔苦楽を共にすべき機関あらず、紅燈緑酒の設備はあれども慈善会あらず、嬌風会あらず、上海口同胞へ公共心の乏しきは今更ならぬ事ながら吾人は其余りに冷淡なるに驚かざるを得ず」

上海の日本人社会が形成される途上においては、最も深刻な問題は「公共」の場が確保されていなかったという問題であった。

「此国際事公共に関するものを求るに、僅に彼の義勇隊と本願寺の布教及育英事業あるのみ、義勇隊の事は他日に譲りて先ず本願寺創設以来の沿革及現状を叙せんとするもの

一は以て此公共の事に盡さるる者の労を賞し、一は以て公共の事に冷淡なる同胞の反省を促さんとするに外なるず」

このような状況で上海布教の拡大を狙う本願寺の活発な活動が展開された。

「本願寺の布教の方法に就ては 多少世人の論難を免れざるべく又創設以来巨万の金員を費消したる丈け夫れ丈實効の擧りしや否も疑問にして、開導学校の如きも亦善美を蓋したるものとは認むること能はざるども、吾人は其事功の跡を云々せんとするにはあらず、其舉美なるに向て、謝意を表せんとする者なり、矯風会もなく、慈善会もなく、国民的教育の公立学校もなき上海に於て、只一本願寺ありて、及ばずながら社会の風教を維持し、此新日本の相続者たる児童を教育せんとする、其本願寺の門前を過ぐる時に、松崎洋行や・・・

5. 上海の日本人の職業と営業分布

このような状況で上海布教の拡大を狙う本願寺の活発な活動が展開された。

「『上海新報』はその他に、20 世紀初期の上海の日本人がいかなる職業に従事していたのか、という問題設定に対して「上海在留日本人営業案内 (The Japanese Business Directory)」という記事を掲載している。

【表】上海在留日本人営業案内 (The Japanese Business Directory)
(1904 年 1 月 2 日、『上海新報附録』より作成)

職種	会社名、営業者名	住所
銀行業	横浜正金銀行上海支店	英租界江岸路
保険業	三井物産会社	英租界四川路
	明治火災又海上	
	保険代理店	
	小野兼基	楊樹浦上海紡績会社内
	明治生命保険会社代理	
海運業	日本郵船会社	英租界江岸路
	大阪商船会社	英租界江南路
	大東汽船会社	北蘇州路
	日本商船会社	法租界
	順泰洋行	法租界洋巡浜
石炭商	泰茂洋行	江西路 2 9
	順泰洋行	恒南路 9
	裕信洋行	同
	日清洋行	同
	■岸要	南京路 3 2

	■■次郎	福州路 5
	深堀乙松	乍州路 1 3
	恒川雅言	北蘇州路 1 9
貿易商	轟長	■租肥料四川路
	篠原藤太	海産物乍浦路 5 7
錦糸及器機商	中桐洋行	北蘇州路 155
	吉田善吉	同 515
	東興洋行	同
	有信洋行	広東路 27
	山口英造	吳淞路 27
	上海紡績会社	楊樹浦
	新有利洋行	四川路
	松村洋行	文路穿虹 0K988
紙商	中井洋行	江西路 51

書籍商	東京勸学会上海分社	阿南路 187
	作新社	四馬路 24
活字印刷	同文滬報館	福州路 25
	作新社	四馬路 52
新聞業	上海週報社	乍路 393
	上海新報社	乍路 38
旅人宿	東和洋行	北蘇州路 42 鉄馬路角
	常磐舎	南滬路 18
	田中旅館	西華德路 3254
	旭館	文路 1
	豊陽館	文路 256
	松崎洋行	乍浦路自 19 至 23
	寿恵広	文路 252
	虎家	閔行路 B5
	益田ホテル	広東路
下宿営業	吉川トヨ	文湫 117
	近藤慶四郎	呉淞路 313
	長澤チケ	文路 361
	吉馴キノ	呉淞路久遠里 908
	横山マサ	呉淞路 899
	井上キク	乍浦路 169
	森匂太郎	有恒路武陵村 58
医業	篠崎都香左	西華德路 11
	丸橋光子	南滬路 13
	綿貫興三郎	四馬路 2 4
	日本博愛病院	同
	吉益医院	文路 1314
	佐々木病院	武昌路仁德里 255
	佐久間三郎	西華德路 11
	博済医局	乍浦路 35

	近藤傳五郎	城北同文書院内
	片山敦彦	北四川路崇等里 (齒科医)
	阪田石三郎	日詩惹街 (同)
菓種商	楽善堂	河南路 46
	済生同薬房	西華德路 1616
	陳広明	
	安江稱次郎	四川路 2
写真業	佐藤傳吉	南京路 b 347
	井上重雄	西華德路 3293
製靴業	小西秀五郎	文路 k 15
	伊藤松次郎	西華德路 3246
	鈴木碌三	百老■路 1227
	小原初次	文路 128
	桑原潤次郎	百老■路 1300
雜貨商	児玉商行	百老■路 234
	瀛華洋行	大馬路
	村井駒次郎	■克■路 1 1
	村上ヨシ	■路 185
	植木カメ	天撞路 567
	山口宇平太	同 365
	古賀洋行	西華德路 3249
	善多洋行	文路 3
	北川彦治	天撞路 56 4
	天野号	文路新栄街 2 2
	和田松太郎	三洋経橋西浜首端監里 3 1
	石原栄次田	百老■路 1 8
	尾原トノ	文路新栄街 8 1
	植木太一郎	百老■路 247
	藤原フミ	文監師路 1184

	岡田洋行	南滬路 3 4
	大和号	吳淞路 96
	樋口良助	同 892
	長手弥三郎	文路 618
	松永勝次郎	法界之洋經橋監方里街内 11
	三宅嘉一	石路 549
	須藤国之郎	文路 2336
	鴨川商店	百老■路 2456
	大木誠一郎	湖北路 225
	植木カキ	天撞路 67
	岩松由太郎	有恒路小虹塔 590
	佐藤文雄	五馬路東棋盤街 43
	吉田忠左エ門	江西路 226
	野村セツ	文路 183
	桑野ニワ	同 1 2 7
	志波徳次郎	北蘇州路 19
	竹田仲太郎	同
	岸田洋行	百老■路 113
	小田林次郎	文路 249
	安生彰平	法界周經路路 116
	大石ヨネ	吳淞路 281
	井上土三郎	密勒路 5 0
	安田米太郎	同
	木戸作二郎	密勒路南 303
	西田留太郎	密勒路 50
	門田カン	吳淞路 1247
	掘福太郎	同 313
	藤原常太郎	新密勒路 224
	成田弥三郎	吳淞路 281 大石方

	山元新被	ハンプル路
	浅見卯三郎	吳淞路 c 8 9 8
	宇藤紋三郎	有恒路 6
	端山嘉三郎	文路 2232
	平田甚太郎	文路 2244
	武田栄太郎	海■路 12 船舶売込
洋傘商	田中政吉	百老■路 229
	吉田岩吉	同 160
	三宅嘉一	石路 994
鶏卵商	東洋鶏卵合資会社	吳淞路 c 397
	市原洋行	南滬路麗農黒 45
	酒井商店	同請遠里 19
	内外鶏卵合資会社支社	天撞路 699
	関西鶏卵合資会社	斐倫里南金里 3 5 2
	山田商会	斐倫里 354
大工職	尾原五郎吉	文路 130
	池田郡蔵	密勒路南金里 292
	武藤五十次	新密勒路新椿里 243
	山口玉吉	虹口伯頓路同昌里 495
畳職	清水勝次郎	密勒路南金里 303
	平野辰一	文路 352
足袋商	三宅嘉一	石路 594
仲買商	米津大濤	江西路 7 号土谷商会内
時計商	森八郎	乍浦路 149
綿操機械製造業	吉馴長太郎	吳淞路
裁縫職	門里カン	夏浦慶里 790
	杉本源吉	密勒路
洗濯業	岩崎福次郎	吳淞路長源里 312
	宇治原政八	文路 277

石鹼製造	豊泰洋行	西門外■■■院対面
	品川貞七郎	漢壁路凡 351
塗物職	藤田米三郎	路■■3368
化粧品製造販売	島貞定吉	老巴子路安里 86
氷ラムネ営業	新堀源次郎	文路 1883
	松尾房之郡	同 179
	秋山傳之	同 2366
	吉川トヨ	同 117
	笹田武市	吳淞 893
	森国太郎	有恒路武陶村 58
	松木輯二	■■克脱路 4
	吉隆洋行	法界永安街
	岡本嘉右エ門	百老■路 305
料理店	六三亭	薪市場 13
	藤村家	乍浦路 402
	月の家	乍浦路 167
	都亭	文路 263
	三好館	武昌路 450
	酔月	乍浦路
飲食業	東京亭	文路 1188
	秋山傳三	同 2360
	谷口亀太郎	吳淞路 727
	岡田羊次郎	密勒路 51
玉突場	日の出	文路 259
	豊陽館	同 254
	田中旅館	西華徳路 3254
	常磐舎	南潯路
	松崎洋行	乍浦路 42

	東和洋行	鉄馬路 37
菓子商	奥村重一	文路 249
	川上房吉	同 10
	山田キン	虹口■克脱路 4
	東屋イノ	密勒路公益里 184
	森春逸	吳淞路 899
	益田恒太郎	文路 242
	白石トミ	吳淞路 472
産婆業	菊池イセ	乍浦路 414
	高田ユキ	西華徳路 3258
	野辺ユノ	文路 179
	山田テシ	文路 249 奥村重一方
看護婦	渡辺エマ	西華徳路藤崎医院内
はりあんま	渡辺秀之助	乍浦路福蘭軍 414
	白井平五郎	文路 1 38
	鈴木鉄太郎	吳淞路 889
質商	新堀源次郎	文路 288
	加藤ナカ	吳淞路 917
理髪業	吉田岩吉	百老■路 160
	岡崎徳蔵	同
	竹原幸太郎	同 281
	宮口竹三郎	吳淞路 476
	村山一太郎	文路 261
	松岡源治	蓬路 3368
	真野嘉吉	文路 2235
	加来半市	乍浦路 412
金物器機製造業	木下喜三郎	有恒路 41
	吉馴号	吳淞路久遠里
	三味線職	石村文太郎
		文路三元里 52

この「上海在留日本人営業案内 (The Japanese Business Directory)」は、20 世紀初期の上海の日本人の経済生活をう買うことができる貴重な資料で今後、歴史地理学との協力によって営業形態の分布状況などを地図上で描くことができるものと考えられる。

6. 上海の日本人と旅館営業

その他の『上海新報』の記事のなかで比較的詳細な記述が見える分野は、日本人によって上海で開設された旅館と料理屋などに関連する部分である。

すなわち、『上海新報』は上海の日本人が関わった東和、松崎洋行、新旅館虎家、豊陽館などの特徴の他、それぞれの地方の方言が上海で使われている事情について次のように紹介している。

すなわち、上海全体において日本人が話す言葉の多くは長崎弁を基調にしながらも、「旭館」「藤村」では大阪弁が強く、東和洋行あたりでは佐賀弁が、そして、上海日本領事館と銀行では東京の言葉が飛び交う事情についても同じく触れている。

7. むすびにかえて

そこで、今回の報告では 1903 年—1904 年に上海で刊行された日本語新聞（週刊）『上海新報』を取り上げ、（1）上海と印刷出版、（2）上海の移民ネットワーク、（3）上海と東本願寺、（4）上海の日本人の経済活動の一端を垣間見ることができた。今回の一連の報告を通して、今後の上海とメディア研究の端緒としたい。